

鉄塔のうた

初代校長 湯田 堯

校庭の隅に立っている

東京電力の送電線の鉄塔――。

鉄塔は、

宇喜田の歴史を見つめながら

四十二年間をじっと立ち続けてきた。

昭和十六年五月

鉄塔は建てられた。

砂町から越中島、そして豊洲へと

工場地帯へ電気を送るため

宇喜田を通り

荒川放水路をまたぎ

空高く

ケーブルは延びて行った。

新川に沿って家並みが続く。

海岸に向かって水路が走る。

水面（みずも）には

小舟も浮かんでいたようだ。

そのほかは

一面の水田と畑――。

畦道が広がる田園の風景。

宇喜田の町は

まだ、村だった。

腰まで蓮田につかり

蓮根を作った。

古い家々には

蓮田で使った道具が残っている。

田圃の中に立っていた鉄塔。

高く堂々と

しかし、静かに――。

鉄塔は

蓮田で働く人々たちを知っていた。

汗を流した

泥にまみれた

宇喜田の人たちに

黙って、語りかけていたのだろう。

昭和二十年八月

大きな戦争（たたかい）は終わった。

空襲で家を焼かれた人々

地方へ疎開をしていた人々が

江戸川へ、葛西へ、宇喜田へ

新しい生活の場を求めて

移ってきた。

しかし、

宇喜田には

まだまだ土の香りが残っていた。

水と魚と緑の草も――。

鉄塔は

何もかも眺めてきた。

また、長い年月が過ぎた。

そして

昭和四十四年三月。

東西線の開通――。

葛西駅ができて

町はどんどん変わって行った。

宇喜田にも

家々が増えはじめた。

第一住宅が建ち、聳えた。

水路にはふたがかけられ道路にもなった。

水がなくなり

田植えの風景は見られなくなった。

田や畑は

宅地や駐車場に姿をかえた。

鉄塔は

昔のままに立っていたが

まわりの様子が変わった。

――大きく変わった。

第三葛西小学校には

プレハブの校舎が建てられた。

宇喜田の町に

もう一つ学校がほしい。

新しい学校をつくろう。

二十一世紀に生きる子どもたちのために――

今までにない

素晴らしい学校を考えよう。

多くの人たちの

願いと営みが始まり

広がった。

大きな力となった。

区役所

教育委員会

宇喜田の町のたくさんの人たち。

設計士さん

建築会社のおじさん。

そのほか

数えきれない人々の努力が

しっかり結び合い

大きな力となった。

鉄塔は見ていた。

始めから終わりまで――。

ダンブカーが土を運び

ショベルカーで掘りおこし

何本も何本も

杭が打ちこまれた。

一階は大地の色

二階は伸び行く緑色

三階には

宇宙につながる青い空色。

まわりは

真白（まっしろ）に仕上げられて

校舎が出来あがった。

鉄塔のまわりには

――何もなかった。

しかし、

今は、素敵な学校がある。

元気で明るい子どもがいる。

心のやさしい宇喜田の子、

進んで学ぶ

大勢の子どもたちがいる。

鉄塔は、

やっぱり黙って立っている。

だけど

ぼくのまわりは賑やかになった。

長い間さびしかったけど

これからは

独りぼっちじゃない。

ありがとう、宇喜田の子どもたち。

元氣いっぱい、どんどん大きく育て。

ぼくよりも

高く、大きく、強くなれ。

鉄塔は

そう思っているみたいだ。

いや、ほんとうに

心の中で

そうさげんでいるのだろう。

宇喜田の

昔から今までを

ずっと知っている鉄塔は

今日も黙って立っている。

雨に打たれても

風に吹かれても

頑張って立っている。

宇喜田小学校の校庭の隅にある

鉄塔は

長い影をおとしながら、

今日も

無言で立ち続けている。

この詩は、宇喜田小学校の開校式典にあたり、本校初代校長 湯田 堯 先生が

『児童の皆さんに少しでも自分たちの学校の誕生までの歴史を知ってもらいたい』

と願い、叙事詩風に書かれたもので昭和五十八年十月十九日（水）発行の学校便り第二十号に掲載されました。

尚、翌日は、施設完成・開校式典が行われた。